

P1-015

子育てにおけるステレオタイプの言葉が母親にもたらす感情経験の検討

田中 里実¹、橋本 創一²、佐藤 翔子³、
田口 禎子⁴、秋山 千枝子⁵

¹青山学院大学、

²東京学芸大学、

³東京学芸大学教育学部、

⁴駒沢女子短期大学、

⁵あきやま子どもクリニック

【問題と目的】

子育てにおける様々な感情は、子どもとの関係性だけでなく、家庭状況、周囲からの言葉、就労状況といった環境的要因によっても生じるものである。本研究では、周囲からのステレオタイプの言葉の影響に着目し、母親の感情経験を調査した。

【方法】

調査対象者は、都内 A 大学の研究協力システムに登録する母親および都内 B 子育てサークルに所属する母親 214 人で、調査は 2021 年 9 月から 11 月に行われた。子どもが 1 歳半～3 歳頃のことについて、①子どもの情報②母親の就労状況③家事・育児環境④子育てにかかるストレス⑤ステレオタイプの言葉による感情経験の有無と具体的エピソードを尋ねた。葉書にて研究趣旨、プライバシーの配慮やデータの取扱い等の倫理的配慮事項を説明し、同意する場合は Google Form にアクセスし、回答してもらうよう依頼した。なお、本研究は東京学芸大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号：396）。

【結果と考察】

子どものこと、子育ての仕方、母親自身のことについて、ステレオタイプの言葉によるポジティブ・ネガティブ感情経験の有無をそれぞれ尋ねた結果、子どものことはポジティブ感情経験あり、ネガティブ感情経験ありがそれぞれ順に 100 人 (46.7%)、73 人 (34.1%)、子育ての仕方は、60 人 (28.0%)、65 人 (30.4%)、母親自身のことには 32 人 (15.0%)、41 人 (19.2%) であった。周囲からのステレオタイプの言葉の影響は、障害のある子どもを育てる母親の傷つき経験について検討されることが多いが、広く子育てにおいて、一定数経験されるものであることが示唆された。またこれらの感情経験の有無を調査対象者ごとに整理したところ、ポジティブ感情経験優位群が 25 人 (11.7%)、ネガティブ感情経験優位群が 22 人 (10.3%)、同等群が 167 人 (78.0%) であった。群ごとに子育てにかかるストレス(苛立ち・煩わしさ、社会的孤立感、育児不安、発達の不安、母親自身の体調不良)の程度を比較した結果、ネガティブ感情経験優位群が他の二群よりも、有意に社会的孤立感を感じやすいことが明らかとなった。この結果のみで因果関係は推定できないが、周囲からのステレオタイプの言葉によりネガティブな感情を経験することは、母親の孤立感を強める可能性があり、今後より詳細な検討が必要であると考えられる。

P1-016

オンライン版の親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”が参加者に与える効果の検証

阪本 夏子¹、原田 大輔¹、木村 美貴子²、
柏木 博子¹、石浦 嘉人¹、峰 真由美²、
山田 寛之¹

¹地域医療機能推進機構 大阪病院 小児科、

²地域医療機能推進機構 大阪病院 看護部

【背景】

親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”(BP: Baby Program) は、生後 2 ～ 5 か月の第 1 子の子育て中の母親が対象の参加者中心型子育て支援プログラムである。我々は、2012 年から BP を続けており、その効果は本学会で報告した。2020 年に新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からオンライン BP が開発された。

【目的】

オンライン BP の効果を検証する。

【方法】

対象は 2020 年 7 月から 2021 年 10 月までに当院で第 1 子を出産した母親 215 名。BP 開始・終了時期に合わせて質問紙法による前向き調査を行った。母親の育児ストレス、愛着形成を評価するため、それぞれ「育児困難感 I」、「赤ちゃんの気持ち質問票」を使用した。オンライン BP 参加者 49 名 (BP 群)、BP 不参加者 166 名 (対照群) に対して、BP 参加前後のタイミングで調査して比較検討した。また、以前報告した対面式 BP の効果とも比較した。統計学的解析は χ^2 検定および t 検定で行い、 $p < 0.05$ を有意と判定した。本研究は当院の医学倫理委員会で承認を得て、協力者全員に書面で同意を得ている。

【結果】

全対象者のうち、オンラインシステムで会話したことがある人が 88%、プログラムをオンラインで行うことは「よい」とする人が 85.6% であった。「育児困難感 I」では、BP 群は対照群に比べて育児ストレスが強い人が多かった ($p < 0.05$)。BP 参加後は育児ストレスが軽減する傾向を示した。「赤ちゃんの気持ち質問票」では、BP 群は対照群に比べて児への愛着形成が低い人が多かった ($p < 0.05$)。また、対照群は変化がなかったが、BP 群は参加後に児への愛着が促進された (4.15 ± 1.4 vs 2.09 ± 0.9 , $p < 0.005$)。さらに、オンライン BP は対面式と同等の満足度であった (99% vs 98%)。

【考察】

母親世代はオンラインシステムに概ね肯定的であった。オンライン BP の参加者は、育児ストレスが強く、児への愛着が低い母親が多かったが、プログラムに参加すると愛着形成の促進が期待できる。オンライン BP は新型コロナウイルス感染防止対策としても有用であり、対面版と同等の満足度を示したことから、今後も感染状況に応じて安心・安全な子育て支援が可能であると考えられた。